

れたのが、ドーバー海峡の向こうにいたロンドンのネイサンだった。この密書を目にした瞬間、誰の仕業か、ロンドンじゅうに「ナポレオン勝利」の誤報が流れたため、大英帝国破滅の目が近い、ということで公債は紙切れ同然の大暴落となった。

それをひそかに買い集めている一団があった。ネイサンの使用人である。翌日、「ウェリントン勝利」のニュースが將軍の使いから伝達された時には、公債がどれほどの値上りをしただろう。ネイサンは莫大な収入を懐にして、ますます腹が出てきた。

これが「ロスチャイルド家台頭」の伝説である。しかし一八九三年にフランスで出版されたギイ・ロスチャイルドの著書『ロスチャイルド自伝』（一九九〇年、酒井傳六訳、新潮社）には、この最大の伝説が誤りであったと書かれている。「最近、ロンドンの証券取引所のおこなった入念な調査は、ワーテルローの前または後の英国の公債の相場はいかなる変化も受けていなかったこと、およびネイサン・ロスチャイル

ドの打った「大博打」という話は完全な誤りであることを、証明した」という。ところがそこには何も証拠が示されていない。同書では、全篇にわたってロスチャイルド家の没落が描かれている。興味深い説である。事実は以下に見る通りだ。伝説ではないネイサン・ロスチャイルドと一族の実態、それは証拠によって証明されなければならない。

敵味方を分けない冷たい金融取引、かかる秘密を尊重する行動、最大の資産家である大衆を味方に引き入れること、五人兄弟の固い結束、各国を股にかけた国際的活動による莫大な利益、通信と密輸における屈指の機動力……など、一級の商人として新境地を開拓したわがロスチャイルド家である。

しかしワーテルローの戦いに先立つ三年前、一八二二年九月十八日、初代マイヤー・アムシェルはネイサンの壮大な世界を見ることなく、六十八歳でこの世を去っていた。

その二年後、イギリスで炭坑の火夫の息子ジョージ・ステイヴンソンが、蒸気機関車の試運転に成功した。鉄道の時代がそこまで来ていたのである。

3 シャーロック・ホームズのロンドン

イギリスの産業革命のまっただ中に飛び込んだネイサン・ロスチャイルドは、英語さえ喋れないまま商売をはじめた。

しかし何もこわいものはなかった。安く買って高く売る、ただこの商業原理に忠実であれば生きてゆけるだろう。専門家はそれを「利鞘をかせぐ」と言う。その専門家がどこにいるか、これが問題であった。イギリスに渡ったネイサンが目にしたロンドンの証券取引所こそ、利鞘かせぎに生死を賭けた男たちの巢窟であった。

証券の値動きは、かつて父親マイヤー・アムシェルが古銭に投機した活動と比べて、その規模とスピードが桁違いに大きかった。ロンドン・シティ——現在ただ「シティ」と呼ばれるほど象徴的な証券界の聖地——が、父親の商才を受け継いだネイサンの胸に火をつけた。

そこには目を奪われるばかりの活気がみなぎり、産業革命の波が一枚ずつの証券に、日々新しいインクのおいと共に映し出されていた。五人兄弟のなかで、最も卓抜な商才を持

っていたネイサン。だが実は、ヨーロッパ大陸でなくこの一歩先んじたイギリスに派遣された幸運が、この伝説の人物を生み出そうとしていたのである。

ネイサンは物思わしげに窓の外へ目を投げていた。シティはすでに、無数の銀行家たちによって支配されていた。なかでもアリング兄弟の力は群を抜き、東インド貿易による香辛料や紅茶、コーヒーから織物に至るまで、株券は値を上げながらこの一族を肥やしてゆくだけであった。資産は七百万ポンドを超え、ヨーロッパ随一の商人となっていた。「これを倒さなければなるまい」

アリング家もまた、ドイツから海を渡ってやってきた。ならばロスチャイルド家が同じようにして勝てないという道理もないだろう。しかしネイサンは、ペアリング兄弟と同じ方法で立ち向かおうとはしなかった。最大の交易地が東インドであるなら、最後にはそこでも買い付けに金銀が必要となるはずだった。幸いにも、貨幣を扱ってきたロスチャイルド

家はその方面でベアリング兄弟を一枚しのぐ腕を持っている。そしてネイサンは、切り札を使おうと心を固めた。

ロンドンにロスチャイルド商會を開設して早くも二年後、イギリスのユダヤ人富豪リーヴァイ・コーエンの娘と結婚してしまったのである。この婚姻がもたらしたものは、ただ大金持の持参金が入るだけの一時的な利益ではなかった。このときシティの金融街を動かしていたもうひとつのユダヤ人の商家モンテファイオーレ一族と閥閥が生まれ、ここにネイサンは金銀の地金を自由に入手できるようになった。なぜならモンテファイオーレ家は、強敵ベアリング一族に金塊を運んできた「モカッタ・ゴールドシュミット商會」と婚姻関係を取り結んでいたからである。

話を現代、われわれが生きている二十世紀末まで飛んでみれば、この一度の結婚が何をもたらしたかという重大な意味を知ることができる。今日のロンドンで、毎朝ロスチャイルド銀行に集まって額を寄せ合いながら密談を重ね、全世界の金価格の値決めをおこなっているのは、ロスチャイルド家の当主のほかには四人いる。そのうちの一人が、この金塊ブローカーとして長い歴史を誇る「モカッタ・ゴールドシュミット商會」の代表である。

コロンブスがアメリカ大陸に向かった時代からスペインで活動していた一族がロンドンで「モカッタ家」を名乗り、シティの支配者「ゴールドシュミット家」と組んで創立した

この金塊銀行は、イングランド銀行のブローカーとしてすでに一大勢力を形成していた。ネイサン・ロスチャイルドは、のちに承図に示すように、あとからロンドンにやってくるその閥閥のなかに入り込むと、財産をそっくりいただき、支配してしまつたのである。

一九九〇年十一月二十七日、イギリスの新首相に選ばれた、ジョン・メージャーは、このモカッタ・ゴールドシュミット商會から誕生した。しかも選挙参謀はロスチャイルド銀行であった。今日のロンドンは、ほぼ二百年前のネイサンの結婚式のままだに動いている。

メージャー首相は、若い頃にアフリカのナイジェリアで活動したのち、「スタンダード・チャータード銀行」の幹部としてイギリスの旧植民地を金融支配する世界で暗躍してきた。ナイジェリアはアフリカ大陸で最大の人口一億を数え、石油の生産量が第一位、天然ガスでも第二位という重要な資源国である。イギリス人の手で書かれた歴史によれば、暗黒大陸の中西部に上陸してナイジェリアを建設したのはイギリス人のジョージ・トープマン・ゴールドアパーという人物だつたとされている。その一帯が奴隷海岸・黄金海岸と呼ばれていた。先年までの状況を考えれば、開拓者の名前がゴールドアパーすなわち黄金であったことは偶然の一致ではない。実際の人物は、イギリス王室の代理人としてロイヤル・ニジエール商會を創立して鉱山業から宝石の世界にまで君臨し、のち

に南アの黒人支配に多大の貢献をした。現在、美術品オークションの世界を動かすサザビーズの最大株主として君臨してきたのが、やはりトープマン一族で、妻が「ミス・イスラエルク」であった。この構造を要約すると、イギリスの王室や貴族にユダヤ人の宝石商が財宝を届けてきたのである。

すべては王室の許可によってこのような事業が進められ、その特許状を与えられた銀行が、メージャー首相を創り出した「スタンダード・チャータード銀行」であった。飛行機をチャーターする、などと表現する通り、この言葉は利権を独り占めする意味を含んでいる。十九世紀の設立当初は、この銀行がインド、オーストラリア、中国などへの侵略貿易の中心となつて活動していたが、その隠然たる勢力が海外の帝国銀行として残り、今日でも香港の紙幣は、この銀行と香港上海銀行によって発行されている。

さて、このスタンダード・チャータード銀行は、親会社として持株会社スタンダード・チャータード社が頭にあり、ここを頂点として数々の重要な系列会社が傘下に収められている。そのひとつがロスチャイルド一族の「モカッタ・ゴールドシュミット商會」である。もうひとつが南アの白人支配者の金庫「スタンダード銀行グループ」、そしてもうひとつが「スタンダード・チャータード・マーチャント銀行」で、一九八五年からこの最高経営責任者のポストについたパトリック・マクドゥーガルは一九六〇年代にロンドン・ロスチャイルド銀行の支配人であつた。その時代に姉妹銀行を足場にして出世を遂げたのが、ジョン・メージャーだつたのである。つまりスタンダード・グループの細胞は、かつての奴隷貿易と金塊業を一手に握つたネイサン・ロスチャイルドの一族によって構成され、今日でも変わらない。のちにくわしく述べる奴隷貿易の東インド会社のアジア貿易独占権が廃止された直後の一八三五年に、当時の額で千五百万ポンドという莫大な補償金を奴隷の密売人に支払つてほとんどの利権を引き受けたのが、ネイサン・ロスチャイルドとその義兄弟モンテファイオーレであつた。ネイサンがロンドンにやつてきた当時、ヨーロッパの商人ベアリング商會の資産が七百万ポンドであつたのだから、その倍を超える金額は誰にも想像できないほどのものであつた。

現代のイギリスと全ヨーロッパについては一歩ずつ話を進めるが、金価格を決定する五大商人のうち、ロスチャイルド銀行とモカッタ・ゴールドシュミット商會の力が、多くの政治家を動かしているのである。しかも金価格を決定する五人のうち二人がロスチャイルド家となる。では残る三人は誰であらう。

多くの人には聞き慣れない名前だが、「シャープス&ヒクスレー商會」の代表がロスチャイルド銀行にやってくる。得体的に知れない会社だが、その親会社はイギリス最大のマーチャント・バンク「クラオンウォート・ベンソン・ロンズデー

ル」という。この最初の名前クラインウォートと最後の名前ロンズデール伯爵家が、オリナー一族を示し、いずれもロスチャイルド家の親戚である。一九八九年にわが国の富士銀行が買収を発表したのは、この子会社としてアメリカにある「クラインウォート・ベンソン」という証券会社であった。五人のうち三人まで……

もう一社は、創設者の名をとって「サミュエル・モンタギュー商会」と名付けられた、これまたイギリス有数のマーチャント・バンクである。サミュエル・モンタギューの娘リリアンは、進歩的ユダヤ主義のための世界連合で名誉会長をつとめるなど国際的に活躍した女性だが、現在は創設者のひ孫が銀行を運営している。四代目に当たるそのデヴィッド・モンタギューは、「^{プリラ}ラ・ロスチャイルド銀行」で副会長というNo.2のポストにある。このモンタギュー家がまた、ロスチャイルド一族から誕生しているのである。五人のうち四人まで……

残る一社は、貴金属商の世界で知らぬ者がいない「ジョン・マッセイ」だが、この親会社は、重役室の名簿にイヴリン・ロスチャイルドの名が記された「チャーター・コンソリデイトッド社」である。南アの悪名高い世界一の金塊業者アングロ・アメリカンの黒幕だ。とうとう五人のうち五人までロスチャイルド家のメンバーによって、全世界の金価格が決定されていることになる……

ユダヤ教徒とキリスト教徒は、手を握らざるを得なかったのである。こうしてネイサンはシテイーで着々と地券を固めてゆくと、そこに一八一〇年、遂に天運が巡ってきた。ベアリング家の総帥としてロンドン証券取引所の牛耳を執ってきたフランシス・ベアリングがこの世を去ってしまった。しかも同じ年の九月二十八日、ネイサンの一族としてユダヤ人の利権を代表してきた「モカッタ・ゴールドシユミット商会」のエイブラハム・ゴールドシユミットが自殺してしまったのである。奇異なことではあるが、このエイブラハムの兄ベンジャミン・ゴールドシユミットも、その二年前に自殺を遂げていた。ロンドン・シテイーに君臨するベアリングとゴールドシユミット兄弟がふと消すように姿が見えなくなった時、ネイサンが無敵の王者としてシテイーを動かすはじめたことは言うまでもない。

ネイサンの名は、神が与える、という意味のヘブライ語に由来する。まさしく神が遣わしたこの男は、金融王としてヨーロッパ全土を支配するロスチャイルド王国を誕生させ、このファミリーが今日に至るまで全世界の金塊を一手に引き受け、動かし続けることになった。

ある日、ネイサン・ロスチャイルドは、ドイツのヴァイオリニスト、スフォールを豪華な自邸に招いて演奏会を開いた。当時スフォールは、作曲家としても高名な人物、押しも押されぬ巨匠として鳴らしていた。ところがロスチャイルド

気掛りなことに、同じ重役室の名簿に、ニコラス・オッペンハイマーの名が書かれている。やがてわれわれが南アフリカへ足を運び、黒人が地底で金鉱を掘り続けている姿を見るとき、遠い太鼓の響きに乗って同じ名前を耳にするかも知れない。この南アに金を求めたイギリス人が、前世紀末に戦争を仕掛けた時、そこへ乗り込んでいったひとりの高名な人物、読者はご存知のはずだ。コナン・ドイル、あの「シャーロック・ホームズ」の作者は、『南アにおける戦争の原因と遂行』と題し、イギリス人がアフリカでおこなった戦争の正しさを緻密な筆で証明しようと試みている。かくして彼はナイトの称号を与えられることになった。われわれもホームズに倣って、緻密な証明を試みてみたい。シャーロック・ホームズを読みながら、ネルソン・マンデラを歓迎する矛盾があつてはならないだろう。ワトソン君、ここは十九世紀のロンドンなのだ。

十九世紀の初頭、ネイサン・ロスチャイルドが築きあげようとした金塊の独占形態は、ベアリング家が手当たり次第にありとあらゆる商品を扱う取引きのなかで、逆にその一切の急所をロスチャイルド家が握るものであった。金銀がなければ買付けは不能になる。こうしてバイロンの詩句に、意味深い次の一節が謳われるまでになった。

——ユダヤ人ロスチャイルドと手を結ぶ、キリスト教徒のベアリング——

家の当主ネイサンは、ヴァイオリンの演奏を聴き終えたあと、巨匠に向かってこう言ったのである。

「これが」と、ロスチャイルドはポケットに手を突っ込み、貨幣をしやらしやら鳴らしながら続けた。「これが私の音楽です」

その顔は明らかに、「金こそ幸せのすべて」と語っていた。貧民街に身を起こしたロスチャイルド家である。同じイギリスの貧民街に生まれ落ちた四人の男の場合は、少々異なるようだ。彼らは「ビートルズ」というバンドを結成した。

一九六三年十一月四日、そのビートルズ全盛時代の出来事だった。

この夜の会場プリンス・オブ・ウェールズ劇場は、華やかな服装で着飾った人間たち、およそビートルズのスタイルとは似合わない、上流社会の聴衆で埋めつくされていた。

「安い席の人は拍手をして下さい。そのほかの人は、宝石をチャラチャラ鳴らして下さい」

このときビートルズのメンバー、ジョン・レノンがステージから放った有名な言葉が、これだった。

入場料が普段の四倍という王室バラエティー・パフォーマンスでの成功のひとつコマである。世界じゅうがその記録フィルムを見た。見た人間は誰もが腹をかかえた。

正式名ネイサン・マイヤー・ロスチャイルドは、ヨーロッパを揺るがしたフランス革命に先立つこと十二年前、一七七